

## —文化財NEWS速報—

## 骸骨と盃を交わす

荒川ふるさと  
文化館だより

荒川区教育委員会  
荒川ふるさと文化館  
荒川区南千住6-63-1  
TEL 03(3807)9234  
登録(15)0035号



三河屋幸三郎奉納「戦死者供養之額」(円通寺所蔵)

写真の絵馬「戦死者供養之額」(ケヤキ材)は、実に 50 年振りの公開となります。この展覧会は、昭和 28 年(一九五三)に開催された、郷土資料展覧会で出展されました。区史刊行(『新修荒川区史』)を控えて、それまでに確認した資料を展示し、編纂室が未確認の資料情報をを集めることが目的でした。この度、所蔵者である南千住一丁目の円通寺に大切に保管されてきたことが確認され、さらにご理解を得てここに紹介するに至りました。

では、写真をご覧ください。何やら賑やかな宴が開かれています。盃を持っているところを見ると、どうやら酒宴のようです。中央で踊っているのは、仏磨という僧侶。この絵馬を所蔵している、円通寺の住職だった人物です。さらに目を移すと、「戦死為供養備之」とあり、「明治十七甲申年六月日」に「施主 三河屋幸三郎」という人物がこれを奉納したことが判明します。

三河屋幸三郎は、飾職人であるとともに、その売り込みもしていた人物で、明治に入つて外国人相手に商売を手がけていたそうです。その幸三郎が、仏磨と図つて、彰義隊士の死骸を上野寛永寺の清水堂境内で荼毘に付したのは、明治元年(一八六八)6 月のこと。火葬の煙に動搖しないようにと、予め下谷・谷中・浅草・三ノ輪の名主に触れが出されたようです。それほど、大規模なもので、実際に 223 体に及ぶといいます(一説に 263 体)。5 月 15 日にあつた上野の寛永寺における彰義隊と官軍との戦闘、いわゆる上野戦争によつて多くの人命が失われました。官軍側は、6 月 2 日に江戸城内で供養の儀式を執り行いましたが、彰義隊の側は、弔う者もなく、しばらく放置されていた。



踊る住職とはやす骸骨(絵馬部分)

参考文献 「佛磨和尚納所西村栄助手帳」(『旧幕府』第四卷第二号、一九〇〇年)、本多晋「幕末の侠商三河屋幸三郎」(『日本及び日本人』明治 44 年正月号)、「明松会五周年史」、「復古記」第六冊

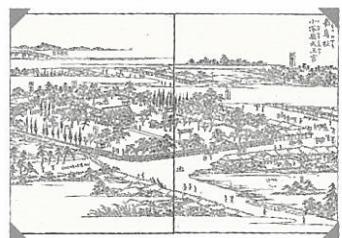
死」とは、彰義隊側の人びとを指し、酒を飲む骸骨は、恐らく彰義隊士といふことになるでしょう。この絵馬は、戦争が後世まで残した影響、あるいは単に、戊辰戦争があつて、明治維新を迎える、というような教科書的な理解ではなく、地域で何が行われたのかを考えさせてくれる貴重な文化財といえるでしょう。

また、そんな歴史が機縁となって、円通寺には、旧彰義隊士に止まらず、旧幕臣関係の者も多数葬られています(『彰義隊戦死者墓、死節の墓他』)。さらに、明治 40 年 10 月に、帝室博物館(現東京国立博物館)から円通寺へ黒門が委譲され、今も境内にたたずんでいます。彰義隊戦死者墓は東京都の文化財に、黒門は区の文化財にそれぞれ指定されました。11 月 3 日から 9 日までの間、東京文化財ウイークで一般公開される予定です。△亀川泰照▽

# 地名のつぶやき

## ⑥南千住のアイデンティティ

〈小塚原の誤解篇〉



『江戸名所図会』(荒川ふるさと文化館所蔵)

登場人物 \* 再び登場おしゃまな南千住(114歳)

— 千住大橋南詰で —

ここから南側の日光道中沿い——今の人には「コツ通り商店街」の方がお馴染みかも——の町とその裏に広がる田畠があり、たしの両親の小塚原町と中村町。両親はいつも一緒にどこかが母とは分けられないほど仲がよかつた。お上が作

つた『新編武藏風土記稿』という難しい本に「地形犬牙して境界弁別しがた」と書かれた程だと自慢していたわ。日光道中初宿の千住宿の下宿に選ばれて、その賑やかさは、北側の上宿にも引けをとらなかつたんだつて。

— 急に顔を曇らせて —

でもね、この「コツ通り」って名前、どんどん一人歩きして、あたしが両親から聞いているのとは違うことが語られているのを聞くと悲しくなつちやう。たとえば、小塚原刑場があつたからとか、火葬場があつて掘ると骨がたくさん出てくるからと、どうしても「骨」に結び付けたらしいのよね。あの加藤雀庵(一七九五~一八七五)さんでさえ、刑場がここに移転してきた頃に俗に「骨が原」と名付け、文字が忌まわしいので「小塚原」になつたんだなんて書いてるし、地元の物知りおじさんだけに駄目押しよ。

参考文献 『荒川ふるさと文化館\*ブックス2資料②雀庵隨筆抄』(荒川ふるさと文化館\*ブックス2資料3年)、『熊野那智大社文書』1(史料纂集古文書編)、『新編武藏風土記稿』(大日本地誌体系1)、『新修荒川区史』(荒川区)、一九五五年)

江戸っ子は、地名を短くして呼ぶことが格好良かったみたい。小塚原町の宿場の飯盛旅籠あたりに遊びに行くことを「小塚原に行く」と言わず、「コツに行く」といつたんだつて。「コツ通り」はね、江戸時代に「小塚原往還(小塚原村絵図)」「小塚原縄手(新編武藏風土記稿)」とか呼ばれていたのよ。

— うれしそうに —

あたしの聞いたところでは、小塚原という名前は、江戸時代よりももつと古いころからあつたんだつて。荒川ふるさと文化館で調べたんだけど、室町時代の文安5年(一四二二)の古い書き物(熊野神領豊嶋年貢目録)に「小塚原鏡円」と出てくるから、雀庵さんは「ごめんなさい」を言つてもらわないと。

えつ、どうして小塚原の名前がついたか教えてくれつて? 実はね、三つのお金話があるの。一つは、天王さま(南千住六丁目、素盞雄神社)の瑞光石が古い塚だから、二つ目は常陸に戻る途中で死んだ多気太郎を葬った塚、三つ目は円通寺(南千住二丁目)さんの縁起に出てくる八幡太郎源義家さんのお話。後三年の役といふ戦争で捕つた敵の首を48個の小塚を

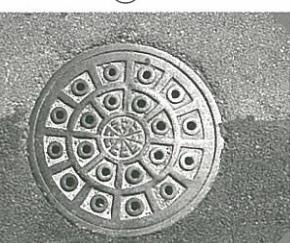
造つておまつりしたんだつて。どれも、古い塚から名前がついたと、いつてるわ。

まあとにかく、江戸時代の刑場や火葬場からできた地名ではないと言ふことよね。

— また深刻そうな顔で —

小塚原の誤解は解けたかな。でも、あたしの悩みはもう片方の「中村町」。中村町になる前は何故「中村村」じゃなかつたんだろう、うーん。△野尻かおる▽

# 街角のしるし



今回はコレ!

さて、ここまでくると、区内でまま耳にする、ある話を思い出す。その話とは、大正11年に三河島処理場が建設された川区域には、早くから下水道が整備された、というもので、さくから衛生に配慮された、都市的な街だった、という話に連なる場合もある。しかし残念ながら、この話は、写真のマンホールにより否定される。

よくよく考えてみれば、昭和7年まで、尾久はもちろん、処理場のある三河島(現荒川)も東京市内ではないから、東京市の施設を利用できなかつた(同時期、三河島・日暮里・南千住の三町は東部下水道町村組合を結成している)。また、たとえ市内であつても、下水流す管が無ければ、利用することはできない。

ただ、この昭和7年前後の時期を「早くから」と捉えていたならば、ここで述べてきたことは屁理屈にすぎない。けれども、「早くから」というならば、当然東京市内の方が早い(あつ、これも屁理屈)。

さて、何であれ、この文章を読んで、なんとなく路上マンホールが気になるようになつてしまつたあなた。くれぐれも車(電車?)にはご注意を! △亀川泰照▽

510 円にて好評発売中!  
『文化館\*ブックス省庵隨筆抄』  
第11号のお薦め本

参考文献 『増補荒川区土木誌』、林丈二  
『マンホールのふた』(日本編)

動物たちがゆく③

兼小塚原刑場跡遺跡調査速報

# 「小塚原の犬」明治維新篇

\*現在進行中の 小塙原刑場遺跡文獻調査の成果  
速報です。

江戸時代、「小塚原の犬」といえば「人を食った奴」の隠語だった。犬が食す物はドックフードと相場の決まつた現在では考えがたいが、当時の犬は、刑場に埋葬された死骸をも“餌”にしていたのである。

例えは『小塚原図』という絵には(写)  
眞、安政2年(一八五五)の大地震で弊  
死した遊女とともに、小塚原の刑場ある  
いは回向院を表すための記号として、地  
蔵と犬が描かれている。さらにも夫の脇に  
は、手首のようなものがある。想像する  
に、土の中から死骸を掘り起こして、手  
首を食いちぎり、他の犬と取り合いにな  
るのを避けて、草むらにくわえて行つた  
ということだろうか。かくて刑死者の  
死骸は、犬の“餌”として、無作為に移  
動する。かつての犬は、現代の鳥のよう  
に、死骸だけでなく、人間にとっての“ゴ  
ミ”を“餌”として「清掃」あるいは  
「拡散」する存在でもあった。

不体裁之趣尤二相聞、此終差置候而は御仁恤之趣意も貰ひ不致哉」（公文錄）明治7年 第60巻（国立公文書館藏）。句讀点・ルビは筆者）。つまり、地表に露出した骨に対し、人目を憚つたのである。柵の種類は、柵矢来さやと朝鮮矢来（竹がきの一種。竹を格子状に組む）で、高さは6尺（約181cm）というから、確かに内側は見えない。

なぜ骨が地中から頭になるのかといふ  
ば、犬が掘り返すためである。刑死者の  
遺骸は、浅くはあつたが地中に埋められ  
ていた。柵で囲えれば犬は中に入れない。  
さらにこの際、「枯骨」は掘り起こされて、  
一まとめにされ、地中深くに埋められた。  
万一、犬が入り込んで掘り返されること  
がないように。

したがつて、この柵の役割は、刑場跡への視線及び犬の排除といえる。見せしめ的効果を狙った数々の刑罰がこの場所で行われていた時からは、発想が転換しているのである。刑場への埋葬は、刑罰の一貫として、縁者の弔いを否定していくが、この時すでに、処罰後には罪科は消滅するという論理が採用されていた。

かくて、「小塚原の犬」は刑場跡から追われた。また、今日、刑場跡付近で野良犬を見かけることもない。いつたい、「小塚原の犬」たちはどこへ行ってしまったのだろうか。

参考文献 宮崎学「死」、塚本学「生類をめぐる政治」、黒田日出男「増補姿としぐさの中世史」、亀川「刑死者の行方」(当館『紀要』3)、氏家幹人『大江戸残酷物語』



小塚原図（江戸東京博物館所蔵）

小松崎少年の願い

子どもの目から見たあらかわ①

**下町の空想画家** 小松崎茂 小松崎茂 氏の名前を聞いてピンとくる人がいたら、かなりの通である。男の子なら一度は見ておきたい、或間違の宣伝、或直

少年の願い 胡録神社 絵が得意だつた小松崎少年は早くから画家を目指していたようだ。少年がよく遊んだ汐入には胡録神社という社がある。ここに画家として大成したいという「願」をかけていたという。氏の自伝的絵物語「旭日は沈まず」(『太陽少年』昭和28年)には胡録神社の社前で熱心に祈る少年の姿が描かれている。実際、画家として大成した氏は、後に純金の小さな鳥居を奉納したといふ。

少年の夢をかなえた故郷社も汐入開拓の流れをうけて平成15年に境内の様相を一変させた。しかし、汐入開拓のはるか昔から現在にいたるまで、この地を変らず見守り続けている。そして今も子どもたちの願いを受け止めているかもしない。

平成17年 小  
松崎茂氏は86歳  
で亡くなつた。  
来る平成17年  
に、氏が南千住  
に生れて90年目  
を迎える。

参考文献 根本圭助『異能の画家  
崎茂』光人社 1993年など

言報

●荒川区指定無形文化財（屋根鋸工、

昭和62年度指定）保持者、金井幸作氏（91才、東日暮里）は、平成15年3月28日に逝去されました。

荒川区登録無形文化財（唐木細工、平成2年度登録）保持者、井上昇氏（71才、東尾久）は、平成15年9月14日に逝去されました。

謹んで、お二方のご冥福をお祈り申し上げます。

## 千住製綿所と荒川（隅田川）

あらかわ  
タイムトンネル⑨

南千住六丁目のビル物流センター脇にあるくねくねと曲がった赤煉瓦扉を見たことがありますか。これが、千住製綿所（通称ラシャ場）の扉の名残です。千住製綿所とは、名前の通り、南千住で毛織物（ラシャ）特に軍服用綿をつくり、開業しました。現在の荒川総合スポーツセンターから荒川（隅田川）の河岸の東京都水道局まで敷地とする大規模な工場でした。

平成 16 年 2 月から、この千住製綿所を取り上げた企画展示「日本羅紗物語—千住製綿所とあらかわの近代—」を開催いたします。ここでは、少し宣伝を兼ねて荒川（隅田川）と千住製綿所の関係をいくつか紐解いてみましょう。

千住製綿所は、当初、水利の便があるとして隅田川水道町（現文京区隅田）に建設することが決定していました。しかし、地質に難点があり地盤改良の必要があることから、明治 10 年、南千住に建設されることになりました。無論、南千住の水利の便が重視されたことはいうまでもありません。

明治 10 年、建設に携わった人々が工事の安全祈願として、近くの素盞雄神社（南千住六丁目）に絵馬を奉納しました。

また、荒川と千住製綿所の関係ですが、まず、建設時に出てきます。

明治 10 年、建設に携わった人々が工事の安全祈願として、近くの素盞雄神社（南千住六丁目）に絵馬を奉納しました。

また、川の水は、地下水の不足分を補うため工業用水としても使用されました。特に日露戦争の影響で軍服用綿の需用が伸び、昼夜業を開始してからは、大量の

現在は、陸上自衛隊松戸駐屯地で保管されています。

現在は、陸上自衛隊松戸駐屯地で保管され、川には建設途中の建物や煙突、工事に従事する職人の姿や、それを指導する外国人（と思われる人）、画面左上に富士山が、右には荒川（隅田川）等が詳細に描かれています。川岸の荷揚場には、木材を積んだ木造船が横付けされ、職人 4 人が、鳶口のようなものを使って木材を積み下ろす作業を行っています。この当時、まだ鉄道などなく、荷物の運搬には川が利用されていました。千住製綿所も例外ではなく、川を利用して、建築部材を運んでいたのでした。

また、明治 37 年には、民有地であった川岸の土地を買収し、仮物置や荷揚場を築造して原料やその他の材料を直に陸揚げするようになります。川の役割は、物を運ぶということだけではありません。川にある資源も有効に使われました。明治年間の写真を見ると、川岸の土地よりも一段高くなつたところに千住製綿所は建てられていることが分かります。この地域は、水利がある反面、洪水などの水害が多い所でもありました。そのため土盛りをして、周囲より一段高くして工場を建設したのです。その土は、どこから運んできたかというと、荒川（隅田川）からです。明治 31 年の記録によれば、そのために専用のトロッコ軌道を作り、川から揚げた土を運びました。

また、川の水は、地下水の不足分を補うため工業用水としても使用されました。特に日露戦争の影響で軍服用綿の需用が伸び、昼夜業を開始してからは、大量の水を得るために井戸をさらに深く掘つても、使いすぎからか水はありません。また新たに井戸を掘つてしまつます。そこで、川の水を濾過して積極的に取り入れようと、明治 37 年に濾水場の建設に着手、同 38 年に竣工しました。

このように川の恩恵に沿っていた千住製綿所でしたが、その反面、洪水の際には浸水等の影響がありました。特に明治 40 年、同 43 年の洪水は甚大な被害がありました。『千住製綿所第二要覧』には、明治 40 年の洪水について詳細な記録があります。

8 月 25 日午後 3 時頃、川が増水を始めます。製綿所門前（ビル物流センター北東角あたり）の道路に浸水し、急遽、仮橋を架けるなど対策を講じました。しかし水位は徐々に上がり、仮橋は流され、製綿所構内にも水が流れこみます。とうとう午後 8 時には、工場を休業せざるを得ませんでした。しかし、時すでに遅く交通網を遮断され家に帰れない職工たちが 60 名も出てしまいました。彼らは、日光街道沿いの日慶寺（南千住七丁目）に一時避難します。製綿所内も、一部を除き浸水し、深い所では 2 尺（約 60 cm）、浅いところでは 12 寸（約 36 cm）ほどに水位がなりました。原料である羊毛は水浸しに、「荒川岸柵」は壊れるなどの被害があ

りました。結局、水が引き再び操業を開始したのは、8 日後の 9 月 2 日になつてしましました。

川とともにあつた製綿所。もちろんそれは、千住製綿所が特異な例であつたわけではありません。あらかわ周辺にあつた他の工場—特に川沿いに建てられた工場の多くにもいえます。川があつたからこそ、明治以降、大規模工場等が進出し、あらかわは大きな変貌を遂げたといえるでしょう。

歴史に「もしも」はないとはいえ、もしも千住製綿所があらかわではなく、文京区にあつたら、今のあらかわ—特に南千住—はどのような顔を持つた街になつたのでしょうか。

ちなみに、今回ここでとりあげた資料は、企画展示で公開する予定です。皆様、展示のタイムトンネルをくぐり抜け、明治のあらかわの姿をご覧ください。

△加藤陽子

参考文献 「千住製綿所用地買収二係ル書類（明治 31 年、東京大学経済学部図書館所蔵）、『千住製綿所第二要覧』（千住製綿所、明治 41 年、国立国会図書館所蔵）など。



創設当初の千住製綿所  
(江崎礼二撮影、荒川ふるさと文化館所蔵)